



書
評

栄養塾 症例で学ぶクリニカルパール

編集 大村健二 厚生連高岡病院外科診療部長

A5 頁 280 2010 年 定価 2,940 円 (本体 2,800 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-01014-6] 医学書院刊

＜書評者＞ 片多史明 (亀田総合病院卒後研修センター長/神経内科部長代理)

「栄養の勉強に良い本はありますか？」と研修医に聞かれたら

どの診療科が専門であっても、臨床医として修得しておかなければならない基本的事項が、いくつかある。栄養管理は、感染症の診断・治療や、水分電解質管理と並ぶ、患者マネジメントの基本であり、臨床医必須の知識・技術である。しかし、栄養管理法・臨床栄養学について、卒前に十分な教育を実施している大学は、まだまだ少ない。卒後教育においても、各種疾患の診断・治療に重きが置かれるなかで、栄養管理が長い間軽視されてきたことは否めない。専門学会を中心とした、臨床栄養の卒後教育の取り組みが実を結び、各施設でも栄養管理についての教育に目が向けられるようになったのは、まだつい最近のことである。

研修医に臨床栄養の講義をしていると、『栄養について勉強するのに、何か良い本はありますか？』という質問を受けることが多い。この質問を受けるたびに、いつも私は困っていた。分厚い臨床栄養学の専門書は確かにある。しかし、この分野の専門家を目指すわけではない医師の、限られた研修時間を費やすには効率が悪く、またよほどの心構えがない限り通読は困難である。内科学の教科書にも栄養管理の項目はある。だが全体のページ数のごく一部であり、そのほとんどが総論的事項である。2～3 日で通読できて、臨床栄養学の全体を俯瞰することができ、なおかつ実践的な内容の本は……と考えると、答えに窮してしまうことが多

かった。

このたび、大村健二先生編集の、『栄養塾 症例で学ぶクリニカルパール』が発刊された。編者の大村先生は、優れた外科医であり、外科代謝学、臨床栄養学の専門家である。本書の内容は、生化学から最新の臨床栄養学の知見、臨床で陥りがちなピットフォールまで、多岐にわたる。大村先生自らが執筆した生化学の章では、学生時代にはその意義が十分に理解できなかった生化学の知識が、臨床的な視点からのスポットライトを浴び、生き活きと輝いている。臨床栄養の基本事項を概観した基礎編、病態ごとの栄養管理のポイントをまとめた応用編では、現在の日本の臨床栄養学をリードする豪華な顔ぶれが“塾講師”として筆を取っている。各項とも、具体的な症例を通じて、時々刻々と変化する病態に応じた、臨床栄養のダイナミズムを追体験できるよう工夫されており、要所に配置された『塾長のひと言』は、まるで栄養を専門とする指導医に、じかに指導を受けているかのようなのである。

『栄養について勉強するのに、何か良い本はありますか？』という質問を受け、今後私が答えに窮することはないだろう。本書は、自身の栄養管理の次元をひとつ高めたいと考えているすべての医師にとって、進化のきっかけになる一冊である。研修医のみならず、上級医の口伝と独学で栄養管理を学ばざるを得なかった世代の医師にも、ぜひ“入塾”を薦めたい。